

風害対策や雪害対策を万全に！
園地を清掃し、野ネズミや病害虫の密度低下を図ろう!!

I 要 約

- 台風の接近や強風に備え、棚や支柱、防風網などを再度点検し、必要に応じて補強や補修を行うなど、風害対策に万全を期す。
- 収穫を終えたぶどう、おうとう、もも、うめ・あんずの園地では、基肥として10月上旬～中旬に標準施肥量の60～80％程度を施用する。
- 園地の清掃や酸性土壌の改良、野ネズミ対策、雪害対策を徹底する。
- うめ・あんずは、休眠期のコスカシバ対策を徹底する。

報道機関用提供資料	
担 当 課	農林水産部りんご果樹課
担 当 者	生産振興グループ GM 工藤 秀樹
電話番号	直通 017-734-9492 内線 5146
報 道 監	農林水産部 次長 栗林 豊 内線 4967

II 特産果樹生産情報

1 生育概況

露地ぶどうの収穫始めは、鶴田町（県生育観測ほ）のスチューベンで平年より11日早い9月15日、シャインマスカットで9月19日であった。

西洋なしゼネラル・レクラークの収穫は、南部町で平年より9日程度早い9月8日から始まっている。

2 作業の重点

(1) 各樹種共通

ア 風害対策

台風の接近や強風に備え、棚や支柱、防風網などを再度点検し、必要に応じて補強や補修を行う。

幹や主枝などに空洞が生じている樹は支柱で支え、縄などで補強する。幼木は倒伏しやすいので支柱を立てて結束する。

イ 園地の清掃

野ネズミの被害を防止するため、園地を清掃し、果実などえさとなるものを処分する。

病害虫の発生が多かった園地では、越冬菌などの密度を低下させるために、落葉や落果を集めて土中に深く埋めるなどして処分する。特におうとうの灰星病のミイラ果は適切に処分して菌密度の低下を図る。

ウ 施肥（基肥）

ぶどう、おうとう、もも、うめ・あんずの基肥は下表を目安に施用する。

施肥量は園地の土壌条件や樹勢によって加減する。

基肥の施用時期と施肥割合

樹種	施用時期	標準施肥量 (kg/10 a、成木)			施肥割合 (標準施肥量に対して)
		窒素	リン酸	カリ	
ぶどう	10月上～中旬	15	10	10	60～80%
おうとう	10月中旬	15	6	12	80%
もも うめ あんず	10月上旬	14	6	10	80%

エ 土壌改良

(ア) 有機物及び石灰質肥料の施用

土壌の酸性化防止と土づくりのため、有機物や石灰質肥料を施用する。施用後は必ず5 cm程度の深さで軽く耕耘する。酸性土壌を改良する場合は、必ず土壌分析を行い、必要な量の改良資材を施用する。

(分析の依頼先：JA全農あおもり土壌分析センターか最寄りのJA等)

(イ) 排水対策

おうとう、ももは耐湿性が弱く湿害を受けやすいので、地表停滞水の排水や地下水位の低下を図るため、暗きょなどの排水対策を必ず実施する。

オ 苗木の植え付け

欠木の多い園地では補植を行う。冬期間に寒害や雪害を受けるおそれがあるので、苗木の植え付けは、春植えが望ましい。春植えは4月中旬頃までに行う。

排水不良地では、植え穴に水が集まり湿害を受けやすいので、排水対策を十分に行ってから植え付ける。

カ 野ネズミ対策

苗木や若木は、野ネズミの被害を特に受けやすいので、食害対策を徹底する。

(ア) 被害の回避

積雪前に果実や作物の残さなどをきれいに片づけ、幹の周囲を清耕し、野ネズミが巣を作るのを防ぐ。また、隠れ場所になる資材等は撤去する。

地上1m位の高さまで（積雪の多い所ではさらに上まで）、金網や肥料袋、合成樹脂のプロテクターなどの被覆資材を巻き付ける。

雪が溶けて幹周りに隙間ができると加害されやすいので、2月以降随時確認し、幹の周りの雪を踏み固めておく。

おうとうでは根雪前に、樹冠下を清耕後に忌避剤（フジワン粒剤）を処理し、食害を防止する。

(イ) 駆除

果樹園で利用できる殺そ剤を使用し、野ネズミの密度低下に努める。殺そ剤以外では、ネズミ捕り器などを園地及び園地の周囲に仕掛けて捕殺する。駆除は積雪前と融雪後の2回行うと効果が高い。忌避剤や殺そ剤の使用に当たっては、農薬の使用基準を遵守する。

キ 雪害対策

(ア) 積雪前の対策

苗木は支柱を立てて枝をひもなどで結束する。成木で、去年の豪雪により被害を受けた枝や雪害を受けそうな枝には支柱を入れるとともに、不要な枝は大枝単位で剪去する。裂開の生じている樹は、カスガイやボルトで補強する。

ぶどう等のハウス施設や垣根では、マイカ線や番線等がゆるんでいる場合は締め直し、支柱による補強を行う。

(イ) 積雪期間中の対策

大雪の際は、雪が新しく軽いうちに樹の雪下ろしを行う。雪中の枝先は、雪が新しいうちに抜き上げる。融雪期に入ったら随時園地を見回り、枝を引き上げる。また、除去してもよい枝で、雪の沈降によって折れたり裂けたりするおそれのあるものは早めに切り取り、直ちに切り口に有効薬剤を塗布する。

(ウ) 融雪促進剤の利用

事前に融雪促進剤を園地に運搬しておく。2月以降数回にわたり、晴天が数日続く日を選んで散布する。

ク 核果類のコスカシバ対策

うめ・あんずは「休眠期（落葉後～催芽前）」に、ガットキラール剤100倍を枝幹部と地際部に薬液が十分かかるように手散布する。

(2) ぶどう

ア 収 穫

シャインマスカットは、外観では収穫適期の判定が難しいので、糖度、食味を確認してから収穫する。収穫が遅れると果皮の黄変や果肉の軟化により商品性が低下する。特に、結実初期の若木では熟期が早まる傾向があるので留意する。

<収穫時の留意事項>

(ア) 朝夕の果実温度の低い時間帯に収穫する。

(イ) 完熟果でも降雨があった直後は糖度が低下し、輸送中の腐敗も多くなるので、なるべく晴天時に収穫する。

(ウ) 脱粒したり果粉が落ちたりするので、穂軸を持って丁寧に扱う。

イ 貯 蔵

貯蔵用の果実は、収穫後速やかに冷蔵施設へ搬入する。果軸が太く、果房全体が引き締まり果粒に張りのあるものとし、穂軸は長めとする。裂果粒や腐敗粒は取り除く。

スチューベン、シャインマスカットは、普通冷蔵（温度0℃、湿度約95%）で約2か月間の貯蔵が可能である。なお、シャインマスカットは、プラスチック容器で穂軸から水分補給することにより、約4か月間の長期貯蔵が可能となる。貯蔵限界の目安は穂軸、果軸の萎縮や褐変が軽く見られ始め、果房当たり1～2粒が脱粒し始めた頃である。



プラスチック容器の装着

灰色かび病は5℃以上の多湿条件で多発しやすいので、貯蔵温度は0℃付近に保持する。貯蔵中に発病した果粒、果房は随時取り除く。

ウ 剪 定

剪定は落葉後早めに行う。特に多雪地帯では、垣根など施設を含め、雪害を受けるおそれがあるので遅れないようにする。

結果母枝を1～2芽残して切る短梢剪定（図1）と5～10芽残して切る長梢剪定（図2、図3）の2種類の剪定法があり、品種ごとに望ましい剪定法は次表により選択する。

シャインマスカットの場合、短梢剪定は剪定時間が短いが、摘粒時間が長く果房の形がやや劣る。長梢剪定は剪定時間が長いが、摘粒時間が短く果房の形が優れる。このため、作業性や生産される果房の品質を考慮して、剪定方法を選択する。

根仕立てにおける品種と望ましい剪定法

剪定方法	品 種
短梢剪定	キャンベル・アーリー、シャインマスカット
長梢剪定	スチューベン、シャインマスカット

※キャンベル・アーリー、シャインマスカットは一文字両側整枝、スチューベンは一文字片側整枝とする。

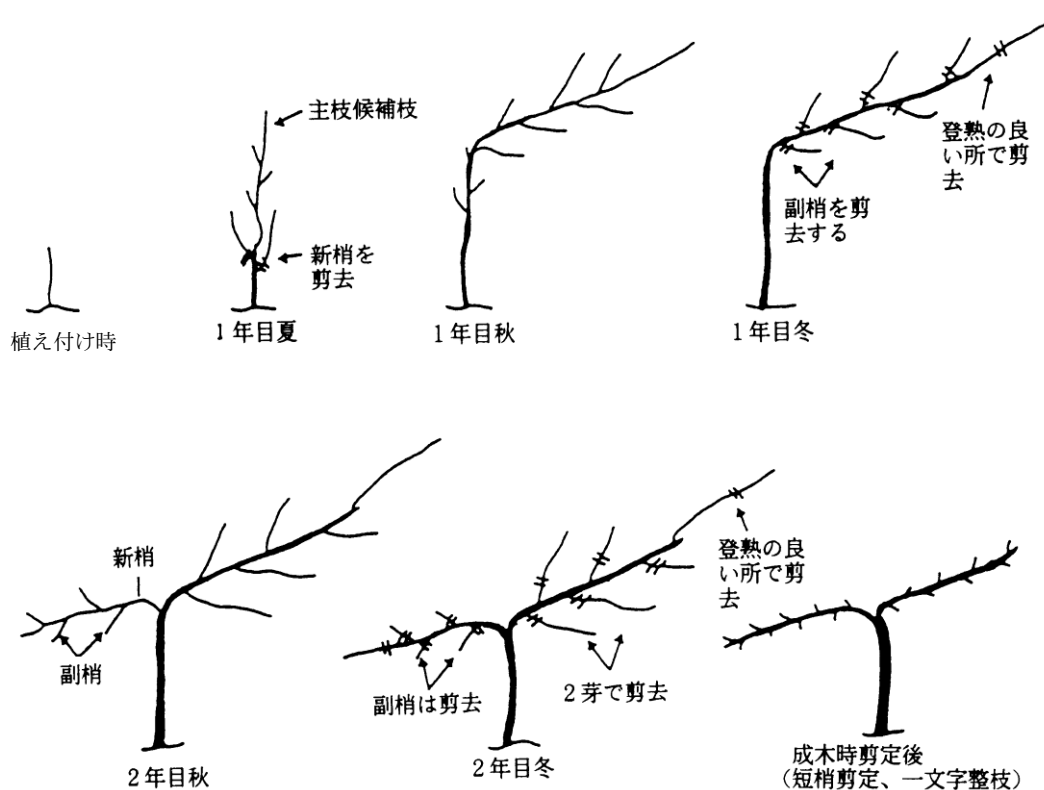


図1 短梢剪定の仕立て方

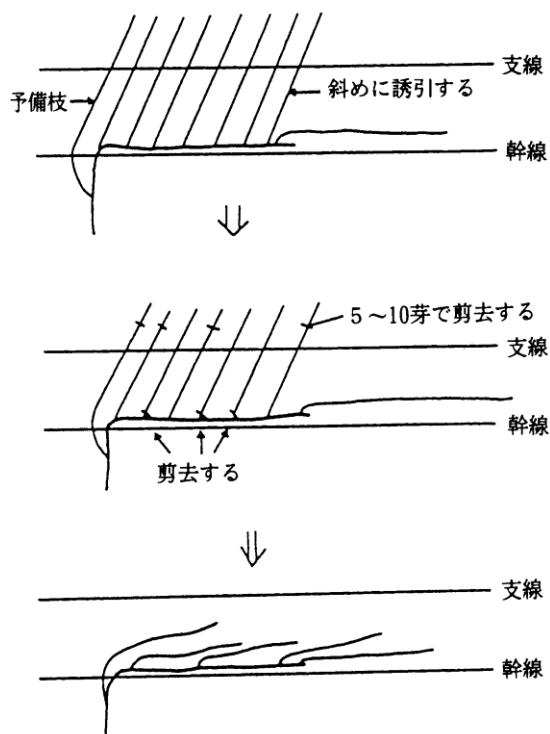


図2 長梢剪定の仕立て方



図3 成木時の長梢剪定後の樹姿

エ 眠り病対策（スチューベンなど）

眠り病は、着果過多や結果枝の徒長、遅伸びなどにより樹体が充実不良となり耐寒性が低下し発生する。

発生を防止するため、主幹や主枝部を稲わらやポリエチレンフィルムなどの被覆資材で被覆し、寒さや乾燥から樹体を保護する。

春遅くまで被覆しておくとも発芽が早まり、晩霜害を受けることがあるので、4月に入ったら早めに被覆資材を取り除く。

オ 休眠期の病虫害対策

褐斑病、べと病の被害落葉は集めて適切に処分する。

晩腐病や黒とう病などの越冬源となる架線の巻きひげや被害枝は除去し、適切に処分する。

晩腐病の発生の多い園地では「休眠期」にデランフロアブル200倍を選択する。

「休眠期」散布は、晩腐病及び黒とう病の重要な防除時期であるので、樹体に薬液が十分かかるように、ていねいに散布する。

ブドウトラカミキリの越冬幼虫が潜んでいる被害枝を切り取って処分する。

(3) も も

ア 病虫害防除

(ア) せん孔細菌病対策

薬剤散布だけで被害を防ぐことは困難であることから、防風対策や耕種的防除を組み合わせた総合的防除を徹底する。

園地内の病原細菌の密度を低下させるため、枝病斑は剪定時に切り取り、適切に処分する。

(イ) 縮葉病対策（令和８年春）

「発芽前」にキノンドー水和剤40の500倍、チウラム水和剤500倍（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）、石灰硫黄合剤７倍のいずれかを散布する。「発芽前」の薬剤散布が防除の基本であるので、丁寧に散布する。

(4) な し

ア 収 穫（ラ・フランス）

収穫始めは、満開日からの日数165日（五戸：本年10月16日）、ヨードでんぷん反応指数１～1.5、地色指数２～2.5（「日本なし地色用カラーチャート」を使用し、果実のていあ部（尻の部分）のコルク層を薄くはぎ、変色しないうちに比色）を目安に、総合的に判断する。

イ 追 熟（ラ・フランス）

追熟の適温は10～15℃である。追熟の揃いを安定させるため、収穫後、速やかに冷蔵施設へ搬入し、2～5℃で7～10日予冷する。

追熟完了の目安は果実を軽く指で押してみて、押し跡がつく頃である。

ウ 長期貯蔵（ラ・フランス）

貯蔵用の果実は適期に収穫したものを扱い、収穫後は、速やかに冷蔵施設へ搬入する。温度0℃、湿度90～95％で約4か月間の貯蔵が可能である。

なお、長期間冷蔵貯蔵した果実の追熟は15℃以下の低めの温度で行う。

エ シンクイムシ類対策

被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。

(5) うめ・あんず

ア カイガラムシ類対策（令和８年春）

「発芽前」に石灰硫黄合剤７倍を散布する。カイガラムシ類の発生が多い樹では、ワイヤーブラシなどで越冬成虫を落としてから石灰硫黄合剤を散布する。

なお、「発芽前」に石灰硫黄合剤を散布すると、この時期の縮葉病及び黒星病対策の防除剤は必要ない。

《 ツキノワグマ出没警報発令中！（５月１日～11月30日） 》

- ・ 1人での作業をできるだけ避け、ラジオやクマよけスプレーを携帯するなど、人身被害の防止に努めましょう。
- ・ 野菜・果実等の収穫残さや弁当の空容器などは、クマを引き寄せる原因となるため、農地に放置せず、適切に処理しましょう。
- ・ 農地周辺の藪を刈払って見通しを良くすることで、クマの隠れ場所を無くし、クマが農地に近づきにくい環境を整えましょう。
- ・ 詳細は県ホームページをご確認ください。
(https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kankyo/shizen/kuma_cyuu.html)

《 秋の農作業安全運動展開中！（９月～１０月） 》

いつもの作業に、いつも以上の注意を。
脚立作業は、安定した場所にしっかり固定し、天板上での作業は行わず、脚立から身を乗り出さないようにしましょう。
機械作業は、ほ場の出入り口などの段差や傾斜による転倒に注意するとともに、安全ベルト着用など、転落対策を徹底しましょう。

《 農薬使用基準の遵守 》

農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認する。

農林水産省「農薬登録情報提供システム」 (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

農薬の使用にあたっては、事前に周辺住民に対し、農薬の散布日時や使用者の連絡先等を十分な時間的余裕を持って知らせる。また、農薬の飛散により、周辺作物や近隣の住宅等に被害を及ぼすことのないように農薬飛散低減対策に留意して散布する。

農業保険に加入し、農業経営に万全の備えを！

【令和７年度第３回りんご等果樹生産技術研修会のお知らせ】

日時	場所
令和７年10月９日(木) 10：00～12：00	(地独)青森県産業技術センターりんご研究所 研修館（黒石市大字牡丹平字福民24）

令和７年特産果樹生産概況は11月28日（金）の予定です。